

インターネットラジオ局がつくる“読む”ラジオ

AWAPURADIO

アワプラジオ通信

2017.3

編集長：阿部浩一 発行：インターネットラジオ アワプラジオ 105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 浜松町ダイヤビル2F うんすい総研気付
info@awapuradio.com TEL:03-6856-0722 FAX:03-6856-0723 http://awapuradio.com/

『Abe's VIEW』 Vol. 27 『『お山の大将』でいることは弱者のための生存戦略である』

お山の大将などと聞くと、“井の中の蛙大海を知らず”のことわざに当てはまるような、見識の狭い人を揶揄するような意味にとらえられがちです。しかしながら、それは全く違います。お山の大将とはオンリーワンのことで、大海を知るからこそめざすことができる立ち位置のことです。

ビジネス・マーケティング用語にレッドオーシャンとブルーオーシャンという言葉があります。常に競争相手がたくさんいて、そこで勝ち抜くための戦略を考え続けなければならないのが前者。逆に未開拓で競争相手のいない分野が後者です。だからといって、ブルーオーシャンは無から有を生み出すことではありません。もともとの自分の強みに「正しく付加価値を付けられること」がブルーオーシャン戦略です。それは単に脈絡のない看板メニューを増やすこととは違います。私もかつてこれでうまくいかなかったことがあります。

いま私は非営利組織（NPO）の寄付集め（ファンドレイジング）のためのウェブ広報を仕事にしています。私はホームページがつかれますが、技術的な面やセンスではホームページ制作会社にいるような人たちにはかないません。

それどころか、基本的なことさえいまだに「誰でも簡単！」みたいな市販の解説書を読みながら作業しているくらいです。仮に技術や知識、センスがもっとあっても、同じような人や上には上の人がたくさんいて、かなりの営業力をもってしても苦しいでしょう。

私の究極の目的は脱成長社会をつくることです。もうみんなが成長しなくていい。これまで日本は社会的な問題はお上（行政や政治）が解決すべきことだという社会でしたが、NPOがもっと強くなって行政と支え合い、上下関係ではなく良い意味での緊張関係を保っていくこと。

市民の側も「税金を払っているのだから！」と何でも行政まかせにするのではなく、かといって行政が本来取り組むべき仕事、たとえば医療や教育にかかわることなどを民間に押し付けるような構図にならないよう、取り組んでいく必要があります。

NPOを強くするには、やはり税金とは別のお金の流れをつくらなければなりません。私は寄付を増やすホームページをつくる人、NPOや市民運動のことがわかる制作者という付加価値によって、今はその他のホームページ制作者と一線を画しています。

自分たちの取り組みを世に広く知らしめたい、寄付を増や

アワプラジオ通信は千代田区社会福祉協議会（東京・九段下）の中にあるちよだボランティアセンターに置かせていただいています。また、アワプラジオやメンバーがかかわるイベント等でも配布しています。バックナンバーがウェブサイトでダウンロードできます。置き場を提供してくださる方も随時募集しています。発送を希望される方もお気軽にご連絡ください。

<アワプラジオとは> 認定NPO法人 OurPlanet-TV で出会った仲間、2009年に開局したミニFM、インターネットラジオ局です。名称は OurPlanet-TV の略称であるアワプラにちなんでいます（アワプラとは別々の団体です）。

して財源を安定させたい。そう考えるNPO法人や社会福祉法人が選ぶのは、かっこよくておしゃれなホームページを安く制作してくれるところでしょうか。



メンタリスト DaiGo さんが著書の中で、あのイチロー選手の強みは野球がうまいことだが、仮にイチロー選手より野球がうまい人が何百人もいたとしても、彼の強みは野球がうまいことだと言えるだろうかというようなことを書かれていて、それはわかりやすいなと思いました。

常にお山の大将をめざすことは、厳しい環境でも生き残っていくための“弱者の生存戦略”でもあるのです。

（阿部浩一）



ちょっとひといき



カロリー焼

スパゲッティの上に牛肉の
ほろりとオニオンの和風炒め

700円

私、阿部がアワプラジオ発祥の地にして現在も重要拠点である“本の街”神保町へ出かけたとき、よく立ち寄るのがこのお店。熱い鉄板でスパゲティの上に牛肉と玉ねぎ、コーンが乗った「カロリー焼」（700円）がおすすめ。平日はライスの量が選

べて豚汁付きなのがうれしい。好きな本を選んで、ここに寄った後で食後のコーヒーを飲むのが至福のときです。

※画像はお店のホームページから

【レストランカロリー】

東京都千代田区神田小川町3-10 江本ビル1F

（JR・地下鉄「御茶ノ水駅」4分、神保町駅すぐ）

<http://kitchen-calorie.com/>



——はじめにお断りしておきますが、原作は未読。キリスト教徒でもありません。そんな私から見た映画「沈黙—サイレンス—」の映画評です。

時は、江戸初期の日本。日本で活動していた神父フェレイラは拷問に耐えかね、棄教する。師匠の行動が信じられないロドリゴとガルペ。二人は日本人・キチジローの案内で日本に向かうも、そこで目にしたのはすさまじいキリシタンたちへの弾圧だった……。過酷な現実を前にロドリゴの苦悩は深まる。「苦しい試練を与えながら、なぜ神は沈黙を続けるのか？」今も昔も宗教が根づかない国、日本。ロドリゴが持っているキリスト像やロザリオを欲しがると日本のキリシタンたちにも現れている。

彼らはキリストの概念は理解できておらず、実は「現世・来世で幸せになる」ために命を捧げているのだ。最後は、見えない「神」という存在より人や物が大事。豊かなものにあふれた現代の日本を思わせる。そんな日本で心の拠り所が崩れていく現実に苦しむロドリゴ。死ぬこともできない自分は「弱い」のかと、もがきながら。彼の分身のような存在がキチジロー。裏切ったり、つきまとったりロドリゴをいら立たせるキチジロー。キリシタンながら、宗教より命を大事にするキチジローに日本人らしい宗教の姿を見た気がした。窪塚洋介の熱演が見もの。ロドリゴを追い詰める役人・イッセー尾形の不気味さもいい。山や海のシーンが多く、BGMなし。ギリギリの状況の中で生きる意味を問いかけてくる。(宮内華子)

～本の紹介～

『GREEN BOOKS』

「ぼんやり」が脳を整理する (2016年10月) 菅原洋平 著 大和書房・1512円



よく、ある問題について考えている最中は思いつかないが、別のことをしている時にふとアイデアが浮かぶことがある。ひらめきはなかなか自分ではコントロールできないもので、出てこないときは焦って余計に行き詰ってしまう。本書は、どのようにひらめきが起こるか、ひらめきやすいように条件を整えるにはどうすればいいか説明している。

私はぼーっとしていることが多いが、あまりひらめくほうではないため、タイトルで気になり本書を手にとった。ただ無策にぼんやりしているだけではだめで、適切なタイミングでぼんやりすることが重要らしい。同じことばかりぐるぐる考えてしまう「悪いぼんやり」にならないように、感情が起こる前にぼんやりモードを切り替えると良いという。そのためには、いま自分がぼんやりしているのか集中しているのか気づいていることが必要そうだ。

著者は作業療法士で、事故や病気で損傷された脳を回復するためのリハビリテーションに従事してきたこともあり、課題設定の仕方についても学ぶところが多い。たとえば記憶の訓練などの課題に取り組むとき、試行錯誤ばかりを繰り返すのは効率的ではないという。少し頑張れば達成できるレベルに課題を設定し、確実にできるようにする、脳に「わからない」というエラーが起こらないようトレーニングする「エラーレスラーニング」という方法が有効だという。普段の自分をかえりみて、高すぎる課題で脳にエラーを起こしすぎて、容量オーバーになっていることに気づき、目標のハードルを下げることの大切さを再認識した。(大森周子)

ヨムヨム旅行記

サリーナス・グランデス (北部アルゼンチン①)



人気観光地ランキングの上位に入る、ボリビアのウユニ塩湖。写真やテレビで見ると機会も多い。だが塩湖デビューにあたり、私が選んだのは、アルゼンチンのサリーナス・グランデス塩湖だ。スペイン語で「大きな塩」というシンプルな名の塩湖は、アルゼンチン北部、ボリビア、チリとの国境に近い場所にある。南米にある三つの塩湖のうち、サリーナスは三番目の大きさだ。(一番はボリビアのウユニ塩湖、二番はチリのアタカマ塩湖)。

4000mの山を超えると、山と山に真っ白い大地が見えた。標高3500mを超えるとサボテンも生えない。枯草と砂利だけの茶色い大地に太陽の光が反射して、そこだけが雪原のように輝いている。塩湖の感触は意外と硬く、凍った氷雪を踏むときに似ていた。足元には、直径60cmほどの六角形が規則的に連なり、模様を描いている。物体が冷却され結晶化する際に生じる、柱状節理という現象らしい。(福井県の東尋坊の岩群にも見られる)。

ここでは採塩場も見ることができる。長方形の穴に雨水を溜め、蒸発させて、塩を作るのだそうだ。プールに溜まった水は空の色を映し、クリスタルの如く透き通った水色で、白い塩とのコントラストが美しい。

そのプールの内側の塩を取ってほんの少しだけなめてみた。予想の上に行く強烈な味。元々は海水だからだろうか、しょっぱさのあとに苦みが広がる。えぐみというか、コクというか、舌の両脇を痺れさせるような味だ。いやちょっと待って。いま立っているのは標高3500m、先ほどは4170mの山を超えてきたはず。そして塩湖の周りは山に囲われている。こんな場所が海の底だったなんて、こうしてその証拠をなめてみても実感ができない。南米はまだまだ底知れない魅力を秘めているのだと、改めて実感する。

今回は乾季だったため、水の張った鏡張りの様子は見るができなかったが、白く輝く大塩原の迫力も劣らずに素晴らしかった。(浅香友里)